

※令和元年8月執筆

母を語る

鴨部地区長 中尾 勲

今年も74回目の8月15日の日を迎えることになるのだが、特にこの日は恒久平和を願うとともに、6人の私たちを育て上げてくれた偉大な母を思い起こして感謝する日となっている。

父が先の大戦にて、昭和19年9月に南洋のニューギニアで没した後、14歳を頭に6人の子供たちの命を守り育て上げるための、母の壮絶な生活が始まっている。

九州は戸畑から父の郷里である竹原へ引き上げて、84歳で命が燃え尽きるまで、浮いた話、曲がった話など何一つあるはずもなく、仏に仕える真心の持ち主として、常に子育てのための厳しい生活苦との戦いの一生であって、まるで苦勞をするために生まれてきてくれたような人であった。

父の存命中は主婦であったが、主人の亡き後は昼夜がなく重い荷を運んだりの日雇いの仕事をしたりした。その後は日本通

運の雑役婦から事務員となり、我々6人の命を守るために誠心誠意働き通してくれている。

ある時、働くばかりの母は、自分はほとんど食わず、ついに過勞と栄養失調で倒れたことがあった。枕元に私たち6人が呼び集められ、それぞれめいめいの身の振り方について泣く泣く諭されたことがあった。我が家にとっては悲しさの極限の出来事であった。実際に三男の兄は神戸の伯父に引き取られていった。

だが、不思議なことに、絶望視されていた母が奇跡的に回復してくれたのだ。これは母の生命力というよりも、門司から出征していった父を見送った今生の別れ時の無言の誓い「貴方の六人の愛し子を守り抜くから」という強い約束から生まれた軍国の母の精神力ではなかっただろうかと思う。

神戸に貰われていった兄も2週間ほどで帰ってきて、再び母子7人の水入らずの安定した生活、貧しいながらも楽しい我が家を取り戻したことである。この時の光景が現在の私の生活の原点になっていることは言うまでもない。

年の暮れが迫り正月近くなると、中学生の姉が弟である私の正月用のセーターを編んでくれていたという、まさに「赤貧洗うの如し」の生活様式を想像するだけでも推して知るべし。である。

一口に言って、6人の子どもを育て上げてくれた母、6人のすべてが成長するまでの衣食住の心配、将来に向けた進路、生活の全てを母の手一つでやりこなしてくれたということである。

実に賢い母であり、心根の強い母、医学の知識はもとより、真実を見る目と社会の善悪を大局的に見通せる母だったからこそ為し得たことである。

「あなたたちのお父さんは日本一の一だったんだよ。」と時あるごとに言い聞かされていたためか、私は父がいなかったことを卑屈に思ったことは一度もなかった。

ある晩秋の寒い真夜中のこと、子どもたち全員が母に起こされ戸外に連れ出されたことがあった。

母が指し示した夜空を見上げると、なんと金色のイチョウの木の上に煌々と黄金の月が輝いていたではないか。

「さあ、これから今この美しさを俳句で歌おう。」と突然に言われ、眠い目をこすりながら指折り数えたことを懐かしく思い出す。

今、こうして平和の尊さを噛みしめながら、改めて母に感謝できることを何よりも有難く思っている。

ところで昨今、欲に狂って夫を殺害する妻、愛児の死が間近に迫っている事を知りながら平然と育児を放棄してしまう母親、己の金欲を満たすために人の命を奪ってまで保険金を詐欺する輩など、あまりにも浅はかで悲しいニュースが多すぎる。

戦後、限りなく豊かになった日本がいつの間にか貧しい国民に変わり果てたのであろうか。日本国中が「物質栄えて精神衰える」という大きな落とし穴にはまっているように思えて仕方がない。

「そうよ、昔の親は偉かったわよ。」と言われればそれまでであるが、「それにしても昔の親は偉かったなあ。」と言わざるを得ない。

